

1. 前回の研究授業のふりかえり（5年 図工科 萩原先生 研究授業：10月25日）

思考力を育む授業づくり：図工科以外の教科にも応用可能

1. 安心して学び合える空間づくり・クラスづくり

2. 学習課題

（1）オープンエンドの学習課題

「抽象画が何に見立てられるか」「見立てたものは、どんなセリフを言うか？」

⇒答えは決まっていない、一つでいいことの強調。みんなが応えられる安心感。

★クローズドエンドの学習課題は？

（2）教科の特性

①「抽象画が何に見立てられるか」よりも「抽象画はどんなセリフを…」の方が図工科としての認識・感性等の深まりに繋がる。学習内容としては「抽象画に込められた作者の思い・感覚・メッセージ」（物語文の主題に近い。自分自身の感じ方も作者の思いと必ず接点があるはず。）

内容は高度になり、子どもたちも解決に困難さを感じるが、困難だからこそおもしろく、話しいがあるともいえ、本校ではこの感覚が不足しているかも…。

②ただし、学習内容へ子どもたちみんなが向かっていけるような工夫も必要。

例えば… 初期指導場面では、スモールステップを踏み、段階的に思考させる。

「抽象画」→「見立てたもの」→「セリフ」※ただ、徐々に「抽象画」→「セリフ」へ
「セリフ」よりも「題名」：「見立てたもの」を生かしやすい。（～な〇〇）

③上記学習内容を子どもたちが豊かに捉えられる窓口としての「造形の構成要素」の提示

色、形、アングル、光、モチーフ・・・など。自分の感じ方がどこから生み出されているのか、分類し、分析的に考えられるようにする。

⇒教科特有のものの見方・考え方

3. 話型の使い方

（1）話型の長所・短所

○→自分の考えを整理しやすく、相手にわかりやすく、端的に伝えられる（ここも本校の子は苦手な印象）。
苦手な子でも話しやすくなる。

●→話し合いが型にはまりやすく、自然なやりとりが失われがち。

⇒授業内では、話型をどの場面で活用するか、丁寧に検討する必要がある。

今回は、「自由な意見交流」で見立てるもののアイディアを出させ、「話型」で自分の考えを整理させた。

（2）日常的な下地づくり

①授業内で、朝の会において

②考える時間の検討も必要か

林先生の場合には、問いに対する瞬間的な反応がポイントか？頭の使い方の活性化？

（企業のプレゼンや入試の面接のイメージ）

一方で、じっくり考える場面、リラックスしてひらめきで考える場面も生きる上では必要

4. 学びを深める教師の「問い」

(1) 教科内容に迫る

- ・抽象画の学習内容「抽象画に込められた作者の思い・感覚・メッセージ」へ誘う
- ・教科特有のものの見方・考え方（造形の構成要素）と結びつけ、子どもが対象を見る目を養う。
※構成要素を言語化し、自分の感じ方の根拠を分析的、分類的に思考する。

(2) 児童理解・子ども理解へ迫る

- ・その子の思考がどのように導き出されてきたのか、子どもの言葉とその子の生き方、生活、ものの見方の特徴などと結び付けて考える。作品を生み出した作者の「思い、感覚、メッセージ」が芸術教科における重要な学習内容であるとするれば、鑑賞した人の「思い、感覚、メッセージ」に迫ることにもなる。教科書掲載の作品から深く読み取るのと同じように、子どもの言葉を聴くことが重要。

2. 研究紀要プロット

	内容	担当
	表紙・裏表紙・中表紙	研推（石戸）
	目次	研推（石戸）
	はじめに	校長
I	研究の概要 ・主題設定の理由 ・研究構想図 ・研究の経過	研推（西田）
II (1)	実践事例 低学年分科会の取り組み ・指導案 ・協議会記録 ・成果と課題	授業者（西田） 研推 研推（西田）
(2)	高学年分科会の取り組み ※内容同上	授業者（井浦） 研推（井浦）
(3)	専科の取り組み ※内容同上	授業者（萩原） 研推（石戸）
(4)	読書活動の取り組み ・今年度の読書活動の取り組みについて ・各学年の取り組み（読書活動交流会資料） ・夏季親子読書の分析結果	研推（井浦） 各担任
(5)	日常の授業交流 ・指導案	授業者
III	学習会の記録	
(1)	河本利廣「ブックトーク」	研推
(2)	林宏之「思考力を育む授業づくり～『言語技術』教育の有効性～	研推
(3)	岩辺泰史「アニメーション」	研推
	おわりに 研究に携わった人	副校長 研推（石戸）